

『釈浄土群疑論』における阿弥陀仏の仏身仏土

村 上 真 瑞

懷惑は『釈浄土群疑論』において阿弥陀仏の仏身仏土はどのように考えるべきかを、次のように論じている。「問曰、今此西方極樂世界三種土中是何土攝。釈曰、此有三積。一是他受用土、以下仏身、高六十萬億那由他恒河沙由旬、其中多有二一生補處、无有衆苦、但受諸樂、等上。故。唯是於他受用土。二言唯是變化土。有何聖教言中、仏高六十萬億那由他恒河沙由旬等。即証是於他受用土。何妨淨土變化之身、高六十萬億那由他恒河沙由旬。以觀經等皆說爲凡夫衆生往生淨土、故知是變化土。三通二土、地前見變化土、地上見他受用土、同其一。各隨自心所見各異。故通三土、由此經言是阿弥陀仏非凡夫境、當作十六觀也。」と説かれるように、極樂浄土について三積を示している。一つには『觀無量壽經』を引いて、仏身の高さが六十萬億那由他恒河沙由旬あり、その中に一生補處の者がいると説き、また衆苦がなく、ただ諸樂のみを受けると説くことからして、他受用土であるという解釈である。二つには、仏身の高さが六十萬億那由他恒河沙由旬であるから他受用土であるとせね

ばならないという経証が別にある訳ではないから、『觀無量壽經』に凡夫往生が説かれていることからして、變化土であるという解釈である。三つには、地前は變化土を見、地上は他受用土を見ると釈する。つまり、同一の場所を見るのであるが、各々その心に随つて所見が異なるので、他受用土、變化土の二土に通ずると解釈するのである。以上三積を示しているが、懷惑はどの解釈を本意としているのか考えてみよう。『釈浄土群疑論』によると、「問曰。前第一積若是他受用土者云何。地前凡夫生若變化土者云何。地上聖人生。釈曰。計彼地前菩薩聞凡夫未証遍滿真如、未斷入法二執、識心麤劣。所變淨土不可同於地上諸大菩薩微細智心所變微妙受用淨土。然以阿弥陀仏殊勝本願増上緣力、令下彼地前諸小行菩薩等、識心雖劣依三託、如來本願勝力、還能同彼地上菩薩所變淨土、微妙廣大清淨莊嚴亦得見故名生他受用土。」と説かれるように、地前の菩薩や声聞、凡夫等は、最高の真如をさとしていないし、人法二執を断じていないから、識心が劣っていて、その識心の所變

である浄土もまた、地上の諸大菩薩の微細なる智心所変の微妙なる受用土には及ばないものであるが、阿弥陀仏の殊勝なる本願増上縁の力を用いることにより、その地前の諸小行の菩薩等をして、その識心が劣っているのにもかかわらず、如来の本願のすぐれた力にすべてをまかせてしまえば、地上の菩薩所変の浄土と同一の微妙広大なる清浄莊嚴を得さしめられると示されている。すなわち、いかに識心の劣った凡夫であっても、阿弥陀如来の本願他力によってこそ、地上の菩薩に等しい他受用土に生ずることができるとして、他受用土説を力説している。以下『釈浄土群疑論』では、論述のほとんどのスペースを費して、他受用土について説いている。他の説については、最後の数行につけ加えられているにすぎない。すなわち、「言三變化土地上菩薩生三者此有現ニ一身理通中報化。随見者凡聖各別。何妨下不得生三上受用土以三下不能見三勝妙之土。又業劣弱不往生三上能見。下為欲接引。地前凡夫生三變化土有何妨魔。又地上菩薩生三變化土者皆是化身亦无有過。」と説かれるように、地上の菩薩が變化土に生ずるということは、もともと地上の菩薩は、報化二土に通じて身を現することができるのであるが、機根の低い凡夫にとつて、すぐれた仏国土を見ることができないから受用土に生ずることは難しく、業もまた劣弱であるから往生することができない。したがって、そのような下根の凡夫を接引せんがた

『釈浄土群疑論』における阿弥陀仏の仏身仏土（村上）

めに、すなわち還相廻向のために地上の菩薩が變化土に生ずるのであると示されている。ここで注意せねばならないことは、今述べたような下根の、往生できない凡夫であるからこそ、阿弥陀仏の弘誓願力の増上縁によってのみ、その他受用土に往生せしめられるのである。それにもかかわらず、阿弥陀如来の弘誓願力について、この部分においては一切ふれず、凡夫の機根の劣っていることだけを述べている。したがって、もし阿弥陀仏を信じない凡夫にとつての浄土を考えるのであればこれで正しいといえる。しかし、今は、阿弥陀仏の論述は、論点からはなれたものであるといわざるを得ない。また、この論述では菩薩の還相廻向について述べているが、このことも同様に本来阿弥陀仏の仏身仏土を論すべき主旨からはなれた問題である。したがって懷感³は、ここにおいて弘誓願力の作用を考えない立場、すなわち法相的立場から凡夫の浄土を考えたのであるといえよう。しかしこの立場は阿弥陀仏の仏身仏土とは別の問題であり、懷感が法相に対して一応法相の立場を理解していることを知らしめんがためにつけ加えたものと考えることができる。したがって懷感が展開した阿弥陀仏の仏身仏土論の本意は、他受用身、他受用土にあったということができよう。その傍証として浄土の三界摂不摂の問題をとりあげてみよう。すでに拙稿³において論じ

『釈淨土群疑論』における阿弥陀仏の仏身仏土（村上）

たように、この問題は、無漏なる如来の淨土へ有漏なる凡夫が往生するという相互に矛盾した者が同一の場所に往することから発起する。その矛盾を懷感は次のように解決をはかる。すなわち、「託^{スルニ}如来無漏淨土^{スルニ}雖^レ以^テ有漏心^ニ現^ス其淨土^ニ而此淨土從^ニ本性相^ニ土亦非^レ緣縛相^ニ應縛^ニ不^レ增^ス煩惱^ニ如下有漏心緣^ニ滅道諦^ニ煩惱不^レ增猶如下觀^ニ日輪^ニ損^ス減^ス眼根^ニ上^ニ也。故非^ニ三界非^ニ三界繫^ス煩惱增^ス也。」と指摘するように、太陽を如来無漏の淨土にたとえ、眼根を煩惱の繫縛にたとえていえると言えよう。つまり如来無漏の淨土を凝視することによって、かえって凝視するという執著がそこなわれ、煩惱の繫縛から放たれると言うのである。したがってこの問題は凡夫と如来無漏の淨土との關係であり、如来無漏の土に具わる力用には、凡夫所變の有漏土に作用することによって凡夫所變の有漏土を清淨化するという増上緣的な作用を見出すことができる。したがって、たとい凡夫所變の土が有漏であつても阿弥陀如来の弘誓願力の増上緣によって往生せしめられるのであるから三界不摂である。その立場から考えるならば、變化土は『成唯識論』卷第十によると、未^レ登^ス地^ニの有情^ノの所宜^ニに隨^フて仏土を化^ス爲^スし、その土は淨穢大小に通じ、さらに前後改転するとも説かれてゐる。したがって未^レ登^ス地^ニの衆生の識心は三界摂であり、その所變もまた三界摂であるから、未^レ登^ス地^ニの有情の所宜にしたがって化^ス爲^スされた變化土もまた三界摂のものと云うこ

とができる。よつて、阿弥陀如来の弘誓願力によって凡夫が往生させられる三界不摂の土は、他受用身・土であり、變化土と言うことはできない。これが懷感の本意であり、前述の三説の中他の二説は法相の立場を意識して、つけ加えたものと言わざるを得ない。その証拠として、『釈淨土群疑論』卷第四によると、「都率天主跡^ト現^ス凡夫^ニ雖^レ名^ニ補^ス處^ニ未^レ成^ス妙覺^ニ。縱^レ當^ニ成道^ニ只^レ現^ス化身^ニ。阿弥陀仏已^ニ成^ス正覺^ニ居^ニ淨土^ニ多^ニ現^ス受用身^ニ」と説かれるように、都率天主は化身であり阿弥陀仏は受用身であると示されている。次に専修と雜修との問題を論ずる中において報、化の淨土の問題を述べている。『釈淨土群疑論』卷第四によると、「問曰。菩薩處胎經第二卷說。西方去^ニ此閻浮提^ニ十二億那由他^ニ有^ニ懈慢國^ニ其土快樂^ニ作^ニ倡伎樂^ニ衣被服飾香華莊嚴^ニ七宝轉閼^ニ。舉^ニ目東視^ニ宝牀隨轉^ニ北視西視南視^ニ亦如是轉^ニ。前後發意衆生欲^ニ生^ニ阿弥陀仏國^ニ者而皆染著^ニ懈慢國土^ニ不^レ能^ニ前進^ニ生^ニ阿弥陀仏國^ニ億千萬衆^ニ時有一^ニ人生^ニ阿弥陀仏國^ニ以^ニ此經^ニ為準^ニ難^ニ可^ニ得^ニ生^ニ何^ニ因^ニ今勸^ニ生^ニ彼^ニ彼國^ニ也。」と説かれるように、『菩薩處胎經』を引いて、西方阿弥陀仏國に往生したいと願う人であっても、ここから十二億那由他にある懈慢國に染著して、進んで阿弥陀仏の國に往生したいと思う者がなくなってしまう。その数や億千万人の中に一人しか阿弥陀仏の國に往生できない、と示される。その理由は次のように説明されている。『釈淨土群疑論』卷第四によると、「釈曰。只由^ニ

此經有^レ三^ノ斯言教^ニ。善導禪師勸^テ諸四衆^ヲ、專修^{スル}西方淨土業^ヲ者、四修靡^レ墜^ニ。三業无^レ難^ニ。塵余一切諸願諸行、唯願^ス唯^ス行^ス。西方一行^ヲ。難修之者万不^ニ一^ノ生^ヲ。專修之人无^レ一^ノ失^ヲ。即此經下文言、何以故。皆由^ニ懈慢^ノ執心不^ニ牢固^ノ。是知難修之者、為^ニ執心不牢之人^ノ。故生^ニ懈慢國^ニ也。正与^ニ処胎經^ノ文^ニ相当^{セリ}。若不^ニ難修^ノ專行^ニ。此業^ハ此即執心牢固^ノ定生^ニ極樂國^ニ也。」と説かれるように、善導が四修を『往生礼讃』に修行方法として示しているところを引いて、西方淨土の修行をする者は、西方淨土と關係のない他のあらゆる願や行を捨て去り、身と口と意との三つの行為に他の願・行を混入させることなく、ただ西方の一行だけを願ひ、行ずるべきである。西方以外の行を混ぜ修した者は万の中に一人も往生できないが、専ら西方の行だけを修した人は千の中に一人もめれることなく往生することができるという。その理由として、行をおこたり、西方に心を執することが固くないからであるとして、西方以外の行である難行を修する者は、西方に心を執することが固くないので懈慢國に生ずるとして、『菩薩處胎經』の文と一致することを述べている。したがって、西方以外の難行を修せず、専ら西方の行を修する者こそが、西方に心を執することが固いから、極樂淨土に往生することができるとしている。したがって、この文のあとで懷感が、「難^ニ其行^ヲ。墮^ニ於^ニ懈慢之邦^ニ。專^ニ其業^ヲ。生^ニ於^ニ安樂之國^ニ。斯乃更顯淨門專行^ヲ。而得^ニ往生^ヲ。豈是彼國難^ニ往而无^レ生^ヲ。最哉学徒不^レ可^レ

『釈淨土群疑論』における阿弥陀仏の仏身仏土（村 上）

不^レ專^ニ其道^ヲ也。又報淨土生^ニ者、極少化淨土中生^ニ者、不^レ少^ノ。故經別説、實不^ニ相違^也。」と説くところの化の淨土というのが懈慢國であり、報の淨土というのが西方極樂世界であることが理解される。したがって、ここで極樂に生まれる者は極て少く、懈慢國に生まれる者は少くない、とするのは、前に、行を西方だけに定めて専らに修行すれば、決して往生することは難しいことではない、と述べていることから考えるならば、この最後につけ加えられた一文は、難行を修する者に対しての戒めであると理解すべきであろう。よって、この問答においては、西方極樂世界を報土と理解しているという証拠となることに注目せねばならない。以上、阿弥陀仏の仏身仏土は受用身受用土又は報身報土であるという証拠があげられることからするならば、懷感在建前として前述の三説を示しているが、その本意は他受用身他受用土こそが阿弥陀仏の仏身仏土であるとしていたことが理解されるのである。

- 1 『淨金』六卷六頁a—b 2 同右 六卷六頁b 3 同右
 - 六卷八頁a—b 4 拙稿『釈淨土群疑論』に説かれる淨土について（『印仏研』32—1） 5 『淨金』六卷一〇頁b 6 『大正藏經』三一卷五八頁c 7 『淨金』六卷五四頁b 8 同右
 - 六卷四九頁b 9 同右六卷四九頁b 10 同右 六卷五〇頁a
- （知恩院淨土宗学研究所研究助手）